

クールな御曹司との愛のない結婚生活が
予想外に甘い

プロローグ

天候に恵まれた十月の吉日。

歴史と伝統あるホテル内にある披露宴会場で、加賀家と青柳家の結婚披露宴が行われていた。神前式が執り行われた神社からこの会場に移動し、すでに二時間。

豪華なシャンデリアが天井で煌びやかに輝き、メインテーブルとゲストテーブルに飾られた花々も会場に彩りを添えている。

披露宴も中盤に差しかかり、司会者が写真撮影のアナウンスをしたことを皮切りに席を立つゲストが増えた。親族席にいた両親は酒瓶を持ちながら、会社関係者を中心にゲストテーブルを回り、一人一人に挨拶をしている。

そんな中、新郎新婦の友人達は本日の主役と写真を撮るために、メインテーブルの近くに集まっていた。

本日の主役、新婦である青柳若菜が身に纏っているのは、プリンセスラインの真っ白なウェディングドレスだ。

胸の下まで伸ばした暗めの茶色いストレートヘアは、今日はヘアアイロンで綺麗に巻かれ、細かいアレレンジが施されたハーファアップになっている。ダイヤがはめられたティアラが若菜の頭上でキラキラと輝き、普段は着けないイヤリングとネックレスの重さも合わさり、若菜は少し気後れしていた。

大好きな人と結ばれる門出の日。一番幸せな日であるはずなのに、若菜は心からの笑顔を浮かべられないでいる。

結婚式自体は楽しいけれど、これからの結婚生活のことを考えると不安で押し潰されそうだった。未来のことを憂^{うれ}いている若菜よりも、友人達のほうがよほど幸せそうに笑っている。

「若菜！ 結婚おめでとう〜！」

「さっきの式で着ていた白無垢も素敵だったけど、ドレスもすっごく綺麗！ 若菜っぽくて可愛らし、本当に似合ってる！」

友人達が口にしてくれる心からの祝福に、若菜は照れながらも「ありがとう」とお礼を口にする。不安に思うことは多々あるものの、こうやって大切な人達に祝ってもらえるのはやはり嬉しいものだ。

こうして祝福してくれるのは、友人達だけではない。

先ほどの神前式では、若菜の両親も「幸せにな리なさい」と温かく送り出してくれた。

大好きな祖母も「本当に綺麗ねえ」と言いながら祖父に頭を寄せていて、こんな夫婦になりたい

と若菜は思ったのだ。

たくさんの「おめでとう」という言葉に包まれる空間は、温かく幸せな空気で満ちている。しかしそんな空気の中で、新郎の母親だけが少し苦い顔をしていたのを、若菜はしっかり見てしまった。（やつぱり、まだ認められていないんだな）

そんな思いを引きずったまま結婚式は終わり、重たい気持ちのまま披露宴会場へと場所を移したのだ。

白無垢からドレスへのお色直しも終わり、滞りなく披露宴は始まった。しかしあの時の義母の表情を、若菜はまた思い出してしまふ。

「ねえねえ、そのドレス旦那さんが選んでくれたって司会の人が言ってたよね？ 本当にすごい良いよ！ 若菜のこと分かってる感じする」

「え？ あ……そう、かな？ ありがとう」

「も……その反応って照れてるの？ 旦那さんからも若菜に何か言ってあげてくださいよ」

もう一人の主役である新郎の恭弥^{きょうや}も、友人に囲まれて歓談中であつた。

しかし若菜の友人から急に話題を振られ、恭弥は若菜のほうに視線を向ける。

真っ白のタキシードを着ている美しい男が、若菜に向かってふわりと優しく微笑んだ。

「うん。何回見ても綺麗だね」

恭弥がそう言った瞬間、若菜の友人達から控えめな黄色い歓声があがる。

恭弥の友人達も「おおーっ」と盛り上がりを見せ、なんだかいたたまれなくなつた若菜は黙つたままで俯いた。若菜の様子は、ただ照れているだけと友人に受け取られたのだろう。若菜が胸中で複雑な思いを燦らせているなんて誰も思っていないようで、若菜の友人達は口々に恭弥のことを褒め出した。

「結婚式の主役は花嫁だと思うけど、やっぱり旦那さんもすごい素敵だよ。私達の三つ上なんだったけ？」

「二十六歳であの加賀庵の社長なんでしょう？　すごいよね、本当に王子様みたい。女の子の理想の結婚相手って感じる」

そんなふうに話が盛り上がっている中で、若菜の親友である元山乃々果が、そつと若菜に耳打ちする。

「若菜、ずっと頑張つてたもんね。ずっと好きだった人との結婚、本当におめでとう」

「……うん。ありがとう、ノノ」

恭弥との関係を、若菜はずっと幼馴染である乃々果に相談してきた。

若菜にとつて恭弥は初恋の相手で、この結婚はその恋が実つた結果。乃々果はそう思っているのだ。

ほんの一ヶ月前までは、若菜自身も乃々果と同じように思っていた。

恭弥から望まれ、加賀家に相応しいと認められて結婚するのだと、本気でそう思っていたのだ。

新郎である恭弥は、全国に店舗を展開している有名な和菓子メーカー「加賀庵」の跡取りで、先日その家業を継いだばかりの青年実業家だ。

新婦の若菜も一応は社長令嬢という肩書があり、若菜の父は祖母の代から始まつた呉服店を継いでいる。といつても加賀庵と比べると規模は小さく、県内に本店が一点舗あるだけだ。

誰もが知る全国的に有名な老舗菓子店と、地元で愛されている呉服店。

世間一般的に見れば、若菜の家と縁を結んでも加賀家が得することはあまりない。

若菜の家も然り、経営に困っているわけではないし、加賀家に援助をしてもらうような立場ではないのだ。

そのため参列者からは、これはよくある恋愛結婚だと思われるだろう。

お見合いから始まつた関係ではあるけれど、若菜と恭弥の仲は良好で、恋人のような時間を過ごしてきた。しかし若菜がずっとそう思っていたのは、恭弥に本命の恋人がいることを上手に隠されていたからなのだ。

結婚式の一ヶ月前に知つた事実には、若菜は何も言えなかった。ただ式の直前に婚約解消を言い出せない程度に若菜の立場は弱く、そして、自分から身を引くことができないくらいには、恭弥に対する気持ちを募らせていた。

茫然としたままだしは進み、気がついたら結婚式の当日になっていたのである。

結婚披露宴というおめでたい場で、親友からの祝いの言葉を否定することなどできるわけがない。

平静を装って「ありがとう」と返したけれど、そう言った若菜の声はきつと引き攀つかっていたことだろう。

（この結婚はただの政略結婚で、私の恋が実ったわけではなかった）

恭弥からの愛なんてなかったのだという事実を、若菜は最後まで乃々果に伝えることができなかった。

恭弥に対する賛辞が聞こえる度に、若菜の心の中に黒いものが広がっていく。

セットされた前髪から覗く切れ長の二重ふたえと、すっと通った鼻筋。イケメンよりも美形という言葉が似合う容姿で、神前式での紋付袴姿もそれはそれは美しいものだった。

誰もが知る老舗の和菓子メーカーを若くして継いだ十六代目社長であり、こういう場での振る舞いも卒なくこなす非の打ちどころがない人。王子様みたいと友人に称されたこの男が、今日から若菜の夫となるのだ。

恭弥本人はまったく乗り気じゃないただの政略結婚なのに、こんなふうに祝福されてもいいのだろうか。内心、そんな思いでいっぱいだった。

こんなことならウェディングドレスなんて着ないほうが良かったかもしれない。

そう思いながら、若菜は自分の胸元に視線を落とす。

何着もののドレスを試着させてもらい、時間をかけて選んだ理想の一着だ。ドレス自体は本当に綺麗で、若菜もこのウェディングドレスを気に入っている。

若菜以上に熱心だったのは夫となる恭弥で、「その二つだったら右のほうが似合ってるよ」「若菜はこっちのデザインのほうが好きじゃない？」と、いろいろな提案をしてくれた。

若菜に付き添う恭弥の姿を見て「本当に優しくて素敵なお主人ですね」と、ウェディングプランナーが頬を染めながら言っていたことを、若菜はふと思い出す。

それらはすべて、恭弥に恋人がいることを若菜が知る前に行われたやり取りだ。今思えば恭弥は、仲睦まじい夫婦であると、若菜や周囲の人間に分かりやすくアピールしていたのだろう。

加賀庵の代表として顔売るために、信頼を築き良い評判をもらうことは大切だ。そのためいい夫として振る舞うことは、恭弥にとって意味のあることなのである。

それなのに若菜は、恭弥が自分を大切にしてくれる意味を深く疑ったりしなかった。

洋風の披露宴を行うことを義母はあまり良く思っていないようだったが、それを説得してくれた恭弥の行動全部を、自分への愛情だと思っていたのだ。

ウェディングドレスへの憧れを捨てられない若菜に気づき、「主役は若菜なんだから僕の母親が言うことを気にしなくてもいいよ。僕が説得するからドレスも着てみせて」と言ってくれ、その言葉で若菜は素直に喜んで今回の形となったのである。

それが正解だったのか、今ではもう分からない。

恭弥の母に更に嫌われてしまったのではないかと、若菜は今更になって後悔を募らせている。

妻思いの恭弥の行動は愛に溢れた美談として司会からゲストに伝わり、優しく素敵な夫という

アピールを存分にしてから二人の披露宴はつがなく終わった。

式が終われば新居に入り、そこからは二人だけの生活が始まる。

誰かに向けていい夫であるとアピールする必要のない家の中。そこで恭弥が自分に対してどんな態度になるのか、若菜はただただ不安だった。

第一章 寝室と私室

幸せという皮を被った披露宴を無事に終え、若菜は恭弥に連れられて新居である都内のマンションに来ていた。

オートロックのエントランスを抜け、エレベーターで十一階まで上がる。新生活のために用意された真新しい家に、若菜は今日、初めて足を踏み入れたのだ。

新婚の二人が帰る場所は、子供の頃に見合いをした大きな日本家屋ではない。恭弥の住んでいた加賀家の本邸に、若菜の部屋は用意されなかった。

二人の新居として恭弥が用意してくれたマンションの一室。

真新しい匂いのある空間に入った瞬間、若菜は少しだけ泣きそうになった。

新居の相談なんてされていないし、どうしてこの場所に住むことになったのかも若菜は分からない。

「結婚したら二人でマンションに住むから、引っ越しの準備だけしておいて」

相談も何もなく、事後報告という形で恭弥がそう告げたのは、結婚式を挙げる一週間前のことだった。

最新の家電が揃った広めの2LDKの新築マンション。

洗濯機や冷蔵庫など、必要な家電は設置されていて、恭弥が事前に買い揃えてくれていたことが分かる。細かいものはまだあまり置かれていないようだが、テーブルやソファ、カップボードなどの生活必需品の家具は、すでにリビングに運び込まれていた。

以前家具のカタログを見せられた際、「こういうデザイン好きだなあ」と若菜が口にしたものばかりだ。

二人で暮らしていくのに文句のつけようもない新居で、不満を言うのは贅沢なことなのかもしれない。しかしこの生活は、若菜が事前に聞いていた話とは随分と違うものである。

（嫁入りしたら加賀家の本邸に住んで、加賀庵の経営にも関わっていくべきだって、お義母さんにならずと言われていたのにな）

加賀家の本邸ではなく、加賀庵の本店からも随分と離れた場所に位置するマンションにしか住まわせてもらえない時点で、自分の価値が測れる気がした。

恭弥の大切な場所に、ただの政略結婚の相手である若菜をあまり近寄せたくないのだろう。結婚したというのに随分な扱いだ。

「疲れた？」

「え……？」

「暗い顔して立っているから、疲れたのかなって思っ

て」
不意に投げかけられた質問に、若菜はぼかんと口を開けて恭弥を見つめ返す。

苦い顔をしてリビングの入り口で立っている若菜を、疲れていると恭弥は判断したらしい。

しばらく返事を忘れていると「若菜？」と不思議そうに名前を呼ばれ、若菜は慌てて口を開いた。「あ、その、疲れているわけじゃないし、暗い顔していたつもりもなかったの。家のこと恭弥くんが準備してくれたのにいろいろ考えちゃって……。その、変な顔していてごめんなさい……」

「別に謝らなくていいよ。式の間ずっと気を抜けなかったと思うし、今日は早めに休もうか？　すぐに沸かすからお風呂入っておいで」

もう誰の目もない場所に來たのに、一応は気にかけてくれるのか。

一瞬、そんな思いが若菜の頭を過った。

（覚悟してきたつもりだし、初日だからって別に気を遣ってくれなくてもいいのに）

ずっと目を伏せ、自分の足元に視線を移す。

一度上げてから落とされるほうが、これからの生活できつと辛い思いをすることになる。気まぐれで優しくされるくらいなら、最初から態度を一貫してくれたほうがずっといい。

そこまで考えてから若菜はゆっくりと顔を上げ、口を開く。

「あ……その、それよりも家の中とか一通り見せてほしいな。私はシャワーで済ませるからお風呂も別に沸かさなくていいし。あ、恭弥くんが入るなら私が沸かすから、部屋の案内だけしてくれたらそこからはもう別行動で、特にすることがないならそのまま寝てもらって大丈夫だし……」

「ねえ、何か緊張してる？」

恭弥に問われて、一瞬ぐっと言葉が詰まる。

べらべら喋って確かに緊張しているみたいだと、自分の言動が急に恥ずかしくなった。

「き、緊張しているわけじゃなくて、恭弥くんに気を遣わせちゃったみたいだから……」

「気を張ってるのは若菜のほうに見えるけど？ 今日からここが自分の家になるんだから、もっとリラックスしてくれていいのに」

自分の家と言ってしまうえば聞こえはいいけれど、正式に妻になったはずの若菜を実家から隔離するための場所だろう。自分の立場を思い出すと、また鼻の奥がつんとする。

加賀家の一員として認められていないのだと、ちゃんと自覚しておかないと折れてしまいそうだ。自分に言い聞かせるように胸の中に言葉をしまい、恭弥に気づかれないように若菜は細く息を吐いた。

「うん。慣れるように頑張るから、とりあえずどこが何のお部屋なのか、見て回ってもいい？」

どこが誰の部屋で、自分が自由に入室することが許されるのはどこまでなのか。

それさえ教えてもらえたら、あとは放っておいてくれて構わない。

結婚式で疲れていないか気にしてくれたけれど、恭弥だって若菜と同じ状況にいたのだ。ずっと気を張っていて、彼だって疲れているに決まっている。

新居の中を簡単に案内してもらったら、お互い好きなタイミングで寝てしまおう。最低限の説明

さえしてもらえれば、それ以上に恭弥の手を煩わせるつもりはないのだ。

加賀家で花嫁修行を受けてきた若菜は、一通りの家事くらいはこなせる自信がある。

でしゃばりすぎずに恭弥の生活をサポートすることが、せめても自分の役割なのだ。

そのくらいのことはちゃんと弁^わえて^まえているから、他人の目がないこの場所では恭弥も好きに過ごせばいい。

たくさん話したり気にかけてたり。そういう夫婦らしい姿を演じるのは、人の目がある場所だけで十分である。

「ああ、そう？ そんなに広い造りじゃないけど、それなら簡単に見て回ろうか」

そう言ってくれた恭弥の後ろをついて歩き、リビング、キッチン、脱衣所と、ひとつずつ部屋の中を見て回る。

共用部の説明が終わって再び廊下に戻ると、まだ案内されていない部屋は残り二つ。そのうちのひとつである部屋の前で足を止めると、恭弥は若菜のほうを振り返る。

「預かってた荷物、とりあえずこっちに入れてあるから」

そう言いながら、ゆっくりと恭弥が扉を開く。

室内に家具はなく、若菜が預けた段ボール箱が五つ積んであるだけの八帖ほどの洋室だった。二つある窓には、まだカーテンすらかかっていない。

「この部屋はほとんど荷物を入れてないし、若菜が好きに使っていいよ」

「あ……うん。分かった。ありがとう」

つまりは、ここが若菜の私室なのだろう。

ということは、もうひとつの洋室が恭弥の部屋になるのだろうと自分の中で解釈し、改めて恭弥に向き直って若菜はお礼を口にする。

「あの、案内ありがとう。段ボールのまま置いておくのも気になるし、今から少しだけ荷解きしようかな。恭弥くんは先にお風呂とか……」

「どうして？ まだ一部屋残ってるよ？」

「へ？」

お風呂でもどうぞと恭弥に勧めて、ここでルームツアーは終わる予定だった。

引っ越したばかりの家とはいえ、恭弥のプライベートな空間となる私室に入るつもりなどなかったのだ。

「え、あの、でも……？」

「荷解きは僕も手伝うから、とりあえず全部見ておいてよ」

今後すべての家事は若菜の仕事となるし、彼の私室に入って掃除することもあるだろう。部屋に入るなど言われたら従うつもりだったが、そうではないということなのだろうか。

触ってほしくないものなどの説明があるのなら、今の時点で聞いておかなくてはならない。

「ああ……うん。それじゃあ今見せてもらおうね」

「うん、おいで」

恭弥が動き出し、その背を追う形で若菜も殺風景な自室を出る。

ただ隣の部屋に移動をしただけなのに、恭弥の部屋に入れてもらえるのだと思うと、なんだか少しだけ緊張した。

「ほら、入って」

「……あ、お邪魔します」

小さな声でそう口にしてから、若菜も室内に足を踏み入れる。そこは先ほど入った部屋と同じ、八帖ほどの広さの洋室だった。

大きなサイズのベッドと、その横にはシンプルなサイドテーブルが置かれている。

恭弥が実家から持ってきたものはほとんど置かれていないのだろうか。無地のアイボリーで揃えられた寝具やカーテンに、木製のゴミ箱と三段のオープンシェルフ。どれも見慣れないものばかりで、家具や雑貨すべてが真新しいものだと思えて一目で分かる。

「ここが僕達の寝室」

「……は、え？」

何を言われたのか分からず、一瞬反応が遅れてしまった。

僕達の、とは、どういう意味なのだろうか。

家の中で無理に夫婦らしく振る舞う必要はなく、部屋だってちゃんと二つあるのだ。

それぞれお互いの部屋として使うものだとはかり若菜は思っていたが、二人が並んでも十分な広さであろうクイーンサイズのベッドには、同じ形の枕が並んで置かれている。

(本当に、ただ眠るためにだけに用意された部屋みたい)

ここが夫婦の寝室だと言われれば、誰もが納得するだろう。

部屋に併設されたウォークインクローゼットの中には、何か入っているのだろうか。恭弥の部屋だと思っていたこの洋室には、あまりにも恭弥の私物が少なく見えた。

「い、一緒に寝るの……？」

「そうだよ。ここにしかベッド置いてない」

若菜の喉の奥で、ひゅつと空気の漏れる音がした。

隠れて付き合っている恋人が恭弥にしていると知った日から、若菜は心を閉ざして、これはただの政略結婚だとずっと自分に言い聞かせてきた。

もう気持ちが通じることはないと諦めた初恋の人。そんな人と一緒にベッドで寝る覚悟なんて、若菜はまったくできていない。

「一通り案内も終わったし、とりあえず順番にお風呂に入ろうか」

なんでもないことのように言われ、若菜の指先がびくりと震える。

若菜が必死に絞り出した声も、少しだけ震えていた。

「あ……えっと、恭弥くんのお部屋って……」

「家ではリビングで過ごすことのほうが多いし、あんまり必要性を感じてないから僕の部屋は作っていないよ」

家主にそう言い切られてしまうと、若菜からはもう何も言えない。

しかしこれはどうなんだろうかと、若菜はちらりとベッドに視線を戻した。

一緒にベッドで眠るなんてやはり受け入れ難く、まともに眠れる気がしない。夫婦なんて肩書きだけなのだから、こういう接触は当然避けるものだと思っていたのだ。

距離を取られたり無視をされたりしても、決して悲しんだりしないようにしようと、若菜はこの一ヶ月の間に覚悟を固めてきた。

突然こういう扱いをされると、身の置き方が分からなくなる。

「恭弥くん、あの……私は自分の部屋で寝たほうがいい、よね？」

「どうして？」

どうしてと言われても、普通は嫌じゃないだろうか。恋人でもない人間が横で寝ているなんて、どう考えても落ち着かないだろう。

自宅の中でまで良い夫であるアピールをする必要などないのだ。誰の目も届かない場所なのだから、夫婦の寝室を一緒にする意味なんてないはずである。

「そういうのって、ほら、落ち着かないから……」

「最初は緊張するかもしれないけど、しばらくすれば慣れるでしょ」

馬鹿だねとでも言いたげな溜息混じりの言葉に、足元がぐらぐらと揺れているような錯覚を起す。慣れるから一緒に寝るぞと言われても、それを快諾できるほど若菜は異性に慣れていない。

「あ……あの、でも」

「結婚式も終わって今日からは正式に夫婦だよ。若菜は僕の奥さんになったんだし、一緒に寝るのもおかしいことじゃないよね？」

「……っ、それはまあ、そ……うん」

先ほどよりも直接的な表現で言われ、緊張のせいか、ひどく上擦った声が出た。

恭弥は本当にひとつのベッドで眠るつもりなのだ。その様子をリアルに想像してしまい、喉の奥がきゅつと狭くなる。

恭弥が何を考えているのか読み取れない。しかしゆったりとした話し方は「間違ったことなど言っていない」自信に溢れているようだ。

——ああ、そうかと思う。

きつとこれは、対等な会話ではないのだ。

二人の新居に関することが事後報告であったのと同様に、この会話も決定事項を報告しているだけ。家の中でどう過ごすのかは恭弥が決めることで、そこに若菜の意思は関係ない。

一緒に寝室で、同じベッドで眠ること。恭弥が冗談ではなく本気で言っているのだと、嫌なくらいに分かってしまう。

「ああ、若菜はシャワーだけでいいんだっけ？ どうする？」

「は……はい、る。シャワーだけ」

「そう。じゃあ行つておいで」

ただの作業行程の確認のようなやり取りを、どうしてこんなにも緊張しながら行っているのだろう。

どういう顔をすればいいのか分からず、シャワーに行くという名目で、若菜は逃げるように寝室から飛び出した。

真つ直ぐバスルームへと向かう足が重たい。脱衣場に入つて足を止めると、そのままうずくまるように床の上にへたり込んだ。

(恭弥くんの中では、そこまでするのが義務なんだろうか)

そこまでの部分を具体的に想像して、頭の中でぐちゃぐちゃに塗り潰した。

一瞬でも、一緒に眠る以上の行為を思い描いてしまった自分が恥ずかしい。

「……どうしよう」

恋人がいる人と政略結婚で夫婦になったことの意味を、若菜は深く考えられていなかった。

世間体だけを考えた仮面夫婦で、甘い触れ合いは本物の恋人だけが享受できるのだらうと、信じて疑ってもいなかったのだ。恭弥にとって、自分がそういう対象になるとも思えない。

家の中では会話すらしてもらえないかもしれないと、最悪の想定すらしていたのだ。

空気のように扱われたり、夫がほとんど帰ってこない生活になったりしても耐えようと、自分の心を守るための覚悟ばかりを固めてきたのである。

恭弥に触られる覚悟も、二人だけで長い時間を過ごす心の準備もしていない。

同じ寝室で眠るなんて夫婦らしいことを求められるとは、本当に思ってもいなかったのだ。

(もし、それ以上の展開になったらどうしよう)

冷たく扱われるという予想が外れたことで、頭が混乱しているみたいだ。あるはずがないと思いつつも、万が一の可能性まで考えてしまう。

準備の仕方も分からないし、ただ普通にシャワーを浴びるだけでもいいのだろうか。

ふらふらと立ち上がった若菜は、見慣れない脱衣所の籠に脱いだ服を順番に落とす。誰かに見られているわけでもないのに、初めて入る場所で裸になるのはなんだか少しだけ緊張した。

(恭弥くんは私じゃない人と何回もそういうことをしているから、気にしないでいられるのかな)

そんな考えが頭に過ると同時に、恭弥の相手の顔まで詳細に思い出してしまう。

一ヶ月前、加賀家の本邸に訪れた際に鉢合わせてしまった、綺麗な女性の顔。若菜に内緒で頻繁に本邸に呼ばれているというその女性は、どうやら恭弥の恋人らしかった。

彼女のことを恭弥に聞くと溜息を吐かれ、「式までもう一ヶ月もないんだから僕の面目を潰すようなことをしないで」と言われて話は終わった。不貞がバレたというのに否定も言い訳も一切なく、ただ予定通りに挙式するだけで若菜は告げられたのだ。

「はあ……」

思い出して、また心が重くなる。

そんな扱いをされたのに、こうやって新居でシャワーを浴びるだけで若菜は緊張でガチガチになっているのだ。これからのことを想像して、この格好で恭弥の前に立つ可能性を考えて、意味もなく泣きそうになっている。

「……ほんと、一人で勝手にこんなこと意識して、馬鹿みたい」

自嘲するように呟き、真っ白な浴室のドアに手を掛ける。

細く息を吐いてからバスルームに足を踏み入れ、真新しいシャワーを手を持った。

どんな準備をするのが正解なのか分からないまま、無駄に長い時間をかけて髪を洗ってしまう。

見たことのないボトルのボディソープを泡立て、いつもより念入りに身体を清めて脱衣所に戻った。

まだ必要最低限のものしか置いていないと恭弥は言っていたけれど、その必要最低限がすっかり揃っているあたり、彼らしいなと思ってしまう。

バスルームには、若菜が普段使っているのと同じメーカーのシャンプーとコンディショナーが並べられていた。ボディソープや洗顔フォームは初めて使うメーカーのものだったが質がいい。

脱衣所の中も無駄がなく、バスマットの上から手が届くところに、売りもののように綺麗な状態でバスタオルが積まれていた。

その中の一枚を手にとって、ふわふわのバスタオルで自分の身体を拭いていく。

身体の水滴が拭われていくのに比例して、なぜだか指先が冷えていくような感じがした。これからまた寝室に戻ることを考えると、胸の辺りがそわそわする。

髪を拭いながらふと顔をあげると、鏡に自分の顔が映っていた。緊張と不安が分かりやすく張り付いた表情をしていて、若菜はすぐに鏡から視線を逸らす。

（まだ何もしていないのに、すごく情けない顔をしてる）

こんな状態で彼と同じベッドに入って、一晩も耐えられるのだろうか。

どれだけ不安に思っても、一度寝室に戻らなければいけないことに変わりはないのだけれど。

「はああ……」

何度目か分からない溜息を落とし、若菜はバスタオルを台に置いた。持参した荷物から取り出した新しい下着を身につけ、恭弥が用意してくれていたパジャマをその上に着る。

若菜の分が白。その隣には、同じデザイングレーのパジャマが畳んで置いてあった。

色違いのお揃いを用意するなんて恭弥らしくないので、これは誰かからのプレゼントなのだろう。お揃いのパジャマで寝るなんて、浮かれた新婚夫婦のようだ。

この格好で寝室に戻ることを考えるだけで、若菜の心はますますしりと重くなる。

重たい足をゆっくりと動かしながら脱衣所をあとにし、再び寝室に戻るとそろそろと扉を開けた。若菜が寝室に入った瞬間、ベッドに腰掛けていた恭弥が立ち上がり、若菜はビクツと肩を揺らし

てしまう。

すたすた歩いて若菜の目の前で足を止めた恭弥は、若菜が首にかけているタオルの端を掴んで持ち上げた。

「若菜、髪」

「え？」

「ちゃんと乾かしておいで。急いで戻ってこなくても大丈夫だから」

わしゃわしゃとタオル越しに髪を拭われ、若菜はまた「へっ……？」と間の抜けた声を漏らす。小さな子供が世話をされているような図に、若菜の頭上に疑問符が浮かんた。

「ドライヤーあったでしょ。疲れているなら僕がしようか？」

何を？ と尋ねようとしたところで言われた意味を理解し、なんで？ という別の疑問に上書きされる。

「えっと、そのくらい自分でできるよ……？」

「そう？ じゃあ早く行っておいで。僕もシャワー浴びてくるから、その間に髪乾かしておきな」

若菜の頭から手が離され、今度は恭弥が寝室から出ていく。

髪すら乾かさずに急いで戻ってきたなんて、自分だけ空回っているようで、もう逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

髪を乾かすために洗面所に戻り、ドライヤーを持った自分の手が震えていることに気づく。一言

では表せない感情がないまぜになって、自分の気持ちなのにその正体がよく分からない。

(このまま恭弥くんと一緒に寝て、私はどうなっちゃうんだろう)

温風で髪を乾かしながら、いくつかのパターンをシミュレーションしてみる。

お互い背を向けて寝るのか、横並びで仰向けになるべきか、それとも向き合うようにしたほうがいいのか。

考えるだけで心臓がバクバクとうるさくなり、ガチガチになった自分が目に浮かぶ。

その上でもし、万が一、夜のお誘いがあつたら――

想像してはみるものの、行為を最後まで想像しようとする、まるで期待しているようで恥ずかしくなる。すべてを諦めてきたはずなのに、本当は恋人扱いしてほしいと思っていたみたいだ。

もう、このまま自室に籠こもってもいいだろうか。

若菜の部屋に寝具はないけれど、ブランケットにくるまって寝たフリをしてやり過ごしたい。そんな馬鹿なことを考えているうちに、恭弥が脱衣所の扉を開ける音が響いた。

そのまま真つ直ぐ洗面台までやってきた恭弥に、「終わった？」と短く問われる。

「あ、えっと……」

「うん、ちゃんと乾いてるね。一通り揃えておいたつもりだけど、足りないものはなかった？」

なぜだか上手く声が出せず、若菜は一度頷くことしかできなかった。

「良かった。それじゃあ若菜は寝室で待ってて。僕もすぐ戻るから」

「つ、あの、やっぱり私は部屋に……」

「ベッドで待ってて」

そうするのが当然だと言わんばかりの一言に、それ以上のことを言う勇気が消えてしまう。

「……うん。わかった」

小さな声で返事をして、若菜はくると恭弥に背を向ける。

行きたくない部屋に向かい、ゆっくりゆっくりと、床に張り付くほどに重たい足を動かした。

本日、入るのが三回目となる寝室の前。取っ手に手をかけ中に戻ると、真つ先に大きなベッドが若菜の視界に飛び込んでくる。

この場所で、どんな顔をして恭弥を待てばいいのだろうか。

ベッドで横になることも腰掛けることもできず、閉じたばかりの扉の前で、若菜はただぼつんと立ち尽くした。

「あれ、何してるの？」

「あ……」

うだうだと迷っているうちに、それなりの時間が経ってしまったのだろう。閉じたはずの扉が再度開かれ、入ってきた恭弥と顔を合わせる。

部屋の入り口付近に立っている若菜を見て、恭弥は少し困ったように表情を曇らせた。

「なんでこんなところで立ってるの？ 冷えるよ。先に入ってくれて良かったのに」

ベッドに目線をやりながら言われるが、若菜は隣に立った恭弥のほうを見ることができない。俯いた若菜が腹の前でぎゅっと両手を組むと、隣で分かりやすい溜息が落とされた。

「はあ、硬くなりすぎ」

若菜の横を通り過ぎ、恭弥がベッドに近づく。そのままベッドに腰を下ろすと、ポンポンとマットレスを叩いて若菜のほうに顔を向けた。

「ほら、こつち。おいで」

いつもより優しい声色でそう言われ、本当の恋人に向けるような表情に、無駄な期待をしそうになる。

手のひらにじわりと汗が滲み、目頭が熱くなった。

想像だけでおかしくなりそうで、これ以上の距離に耐えられる気がしない。許されるなら今すぐ逃げたい。

「ねえ、若菜」

名前を呼ばれ、若菜はゆっくり顔を上げる。

風呂上がりの恭弥は若菜と色違いのパジャマ姿だ。シンプルな格好をしていると、彼のスタイルの良さが際立つ。

「緊張してるの若菜だけじゃないよ。お願い、こつち来て」

言われた瞬間にぶわりと感情が込み上げる。

弾かれたように足が動き、数歩前に進んでしまえば当然、たどり着くのはベッドの上だ。

（これから、ただ一緒にベッドで眠るだけ）

そう分かっているのに緊張するのは、一瞬でもその先の行為を想像してしまったせいだろうか。恥ずかしいことを考えた自分を悟られたくなくて、恭弥の顔を見ないようにしながら若菜もベッドに乗り上げる。

恭弥の顔を見ないまま、二つ並んだ枕に視線を向けた。

「……あの、私は奥に行けばいいの？」

「うん。若菜が好きなので寝てくれていいよ」

「……そっか。ありがとう」

表情を見てはいないけれど、若菜の耳に届く声はどこか優しく聞こえた。

視線を上げることもできず、真新しいシートを見つめながら可能な限り端に寄って。ぺたんと腰を下ろす。わざわざ端に寄ったというのに、恭弥はその距離を詰めるようにしてベッドに上がり、若菜に耳打ちした。

「少し暗くする？」

「ま……真っ暗でも、なんでも。恭弥さんの好きな明るさでいいよ」

「じゃあ明るいままでしょうか」

「え……？」

恭弥に顔を近づけられ、慌てて身体を後ろに引く。若菜の肘がシーツに沈み、あとおんの少しでも動いたら、背中までマットレスに触れてしまう体勢になった。これ以上後ろに崩れたら、もうどこにも逃げ場はない。

「あ、あの……」

話すと、息が触れてしまいそうだ。近すぎる距離に鼓動が早くなり、寝室に入って初めて、若菜は恭弥と視線を合わせた。綺麗な顔が目前に迫り、びくりと喉が戦慄く。

後頭部に回された手に優しく頭を支えられ、あ、と思った時にはすでに唇が触れていた。

そのまま数秒間お互いの唇を触れ合わせ、名残惜しそうにちゅつと短い音を残し、唇が離れて距離が開く。今、自分がどんな顔をしているのか分からない。

「キスは初めてじゃないのに少し硬くなりすぎかな。意識してくれるのは嬉しいけど、もっと力抜いてよ。こんなにガチガチの状態ですることじゃないんだから」

「あ……え、あ……」

「ほら、もう一回」

近づかれて、顔が熱くなる。心臓が壊れそうなくらいにバクバクと騒いでいて、外まで音が聞こえてしまいそうだ。

何の覚悟もないままにもう一度唇が押し当てられ、今度は長い時間をかけて触れ合わされる。角度を変えて何度も唇が塞がれ、時折混じるリップ音にじわじわと熱が上がっていく。

腕で上半身を支えることができず、気づいた時には若菜の背中が、完全にベッドに付いてしまっていた。恭弥が若菜に覆い被さる形になり、首の後ろに添えられた手によってキスの角度を変えられる。

薄く開いた唇の隙間から恭弥の舌が差し込まれた。

「っ、は……ふ、あ」

「うん、そのまま開けてて」

「は……あ、やら、っあ」

長い舌で上顎を舐められ、シーツを握り締める手にぎゅつと力が籠った。

（——こんなキスを、私は知らない）

若菜が恭弥とキスをするのは、これが初めてではなかった。

彼に恋人がいると知るまでは、婚約者である自分が恭弥の恋人気取りだったのだ。結婚するまで手を出さないと言われてはいたけれど、キスくらいしてみたいと若菜からねだって、触れて離れるだけのキスを過去に何度かしてもらったことがある。

一度だけ、舌を入れるキスに変わった時もあつたけれど、その時もここまで丁寧な舐めとるようなやり方ではなかったのだ。

自分が知らないキスのやり方を、恭弥はどこで覚えてくるのだろう。考える余裕さえ食べられていくようで、どんどん胸が苦しくなる。

若菜がおかしくなるラインを、恭弥は簡単に越えてしまう。

「つつ……う」

ゆっくりと口内を撫でる舌の動きに、直接触られたわけでもないのにお腹の奥がじんと疼く。

遠慮なく舌同士が絡み合い、若菜の口の端からはだらしなく唾液がこぼれた。

そんなに大きな音ではないはずなのに、ちゅ、ちゅっという水の音がやけに大きく響く。音の発生する場所が耳に近いせいだろう。口の中で鳴る小さな音でさえ、鮮明に拾ってしまう。

最後に「は……」と恭弥が息を落とし、ゆっくりと唇が離れていった。舌同士を繋げる唾液の線が、細くなってぷつりと切れる。

「は、はあ……あ」

「少しは力抜けた？」

恭弥の問いに返事をすることもできず、乱れてしまった呼吸をどうにかしようと、若菜は小さく息を吸う。

ようやくキスが終わったのだと認識するよりも先に、恭弥の指が今度はゆっくりと若菜の首筋をなぞった。

「え……？」

「脱がせるね」

「……え、あ……ま、待って。待って……」

「うん、なあに？」

若菜が必死に叫ぶと恭弥は一度手を止めてくれたが、どこまでも余裕のある表情をしている。

恭弥が慣れていることは知っていたし、もしかしたら夜の行為に誘われるかもしれないと、若菜だっと思ってはいた。しかし、シャワーを浴びながら想像していたとはいえ、実際に自分の身にかかる刺激が強すぎる。

「恭弥くんって、わ、私としたい……の……？」

「どうしてそんなこと聞くの？ したいよ。したくなかったら一緒に寝ようなんて誘わない」
直接的な言葉に、一瞬で若菜の顔が赤く染まる。どう答えばいいのか分からず、心臓が爆発しそうだ。

電気を消すのか聞かれた意味を、若菜はこの時になってようやく理解したのである。

（本気でそういうこと、恭弥くんとしなないといけないの……？）

脱がされないように、シャツの合わせを無意識のうちにきゅっと握ってしまう。

キスだけでも頭がおかしくなりそうだったのに、それ以上の行為なんて完全に未知の領域だ。

「つその、私、勉強不足かもしれない、から……。一応覚悟はしてたつもりんだけど……」

自分の言っていることが、あまりにも情けなくて泣きそうになる。

しかし、何も知らない子供ではないからこそ、自分では無理だと思ってしまうのだ。

恭弥の前で、見苦しくて恥ずかしい格好を晒すことになるのだと思うと耐えられない。

涙目で訴える若菜を見下ろし、恭弥がゆっくりと若菜の頬に手を伸ばす。そのまま額に口付けられて、ひゅつと若菜の喉が鳴った。

「き、恭弥く……」

「勉強が必要なこともないと思うし、覚悟してくれてるならそれだけでいいよ」

「でも、あの、本当に何すればいいのか分からないし……」

「してみないと分からないままだよ。若菜はずっと僕としないつもり？」

「ずっとしない可能性だって、若菜は考えていたのだ。」

その予想が初日から覆されそうになっているから、こんなにも困惑している。

夫婦がセックスをすることは、何もおかしいことではない。それでも、無駄な期待を抱かないために、恭弥が自分を抱く理由を知りたいと思ってしまう。

ただの性欲なのか。早急に跡取りが必要なのか。新婚初夜にセックスをすることが恭弥の中で義務なのか。もしくは――

少しでも自分に気持ちが向いているのではないかと、甘いことを考えそうになって嫌になる。恭弥にとって、セックスが特別視するような行為ではないことくらい分かっていたはずなのに。

（私だけがこんなにドキドキして、本当に虚しい）

互いの気持ちはどうであれ、若菜は加賀家に嫁入りした身だ。

遠くないうちに、「跡取りになるような子供を」と言われる日だつてくるだろう。その時には、

もう避けられない行為となる。

もし、早く子供を――と恭弥が考えているのであれば、若菜に断る理由はない。家同士が関わる結婚である以上、必要なことはすべて頑張るつもりで、若菜は恭弥との結婚を受け入れたのだ。

しかし、頑張りたい気持ちはあるのに、どうしても声が震えてしまう。

「で、電気……暗くしたい」

「分かった。他にしてほしいことはない？」

「……ん。あんまり思いつかないから、今はない……」

「そう。されて嫌なことがあったら、また教えて」

言われてから部屋の明かりが落とされ、薄暗くなった室内で小さく息を吸う。

若菜の頬に触れていた手が、ゆっくりと肌を撫で下降していく。首から鎖骨へなぞるように滑り、胸元の釦ボタンの上で恭弥の指が一度止まった。

「……あ」

「脱がせるね」

手の平を通じて、心臓の音が聞こえてしまうんじゃないだろうか。

若菜の不安をよそに、恭弥の指がひとつずつ留め具を外していく。胸の部分がはだけると、外気に触れた部分が少しだけ冷えた。

「へえ、可愛い色」

下着のことを指しているのだろうか。部屋を暗くしたけれど、カーテンのすき間から明かりが入り込んでいるせいで色を確認できる程度には見えているらしい。

「そ、そんなに見るの、恥ずかしいから、なんか……」

「ああ、恥ずかしいだけなら慣れてもらわないと。これからもずっと恥ずかしいことするんだから」
「は……」

若菜の首筋に恭弥の顔が埋まり、肌に息が直接当たる感覚に背中がゾクゾクした。

その間にも片手で釦が外されていき、はらりと前が開かれる。若菜の上半身を隠すものは、もう下着しか残っていない。

「っん……」

恭弥の手が脇腹に触れ、首筋に埋められていた唇は若菜の胸元に到達する。

（——こんなに恥ずかしくていやらしいことを、みんな当たり前のようになっているのか）

考えると、ぐらりと眩暈がする。

すべてが初めての若菜と違い、恭弥は経験があるのだろう。埋まらないその差が、今こんなにも苦しい。

初めてだからそう感じるだけで、もっと回数を重ねていけば、こんなこと大したことないと思えるようになるのだろうか。

「ふっ……、ん」

「はあ、可愛い」

小さく落とされた声も、聞き逃すことなく若菜の耳に入ってくる。

こういう時にこういうことを言う人なのだと、意識したくないのに考えてしまった。

恭弥らしくない。でも、聞き間違えるはずのないくらい、よく知った彼の声だ。

「背中、少し浮かせてくれる？」

いつの間にか背中に回された手が、下着のホックに触れている。恭弥が何をしようとしているのか分かって、躊躇いながらも若菜はそれを受け入れた。

背中を浮かすと、わずかに表情を緩めた恭弥が片手で器用にホックを外す。

シャツと共に下着が腕から抜かれ、上半身を露わにした若菜はまたシートに背中を付けた。

薄暗い室内だが、真っ暗なわけではない。自分の胸に恭弥の視線が向けられていることに、居心地の悪さを感じてしまう。

「う……」

「駄目だよ。隠さないで」

「……っ、はい……」

恥ずかしいのに動けない。

ただ恭弥のすることを拒んではいけないのだと、それだけが若菜の脳に染み付いている。

子供を作るのは妻の務めで、政略結婚とはそういう行為を含めての契約だ。

恭弥にその気がなければ若菜から誘うつもりはなかったが、こうなってしまったら仕方がない。
「まだ緊張してるね。ゆっくり進めていくから、あんまり怖がらないで」

若菜を慰めるように、柔らかく頭を撫でられる。

自分だけがこの行為を特別視している気がして、なんだか酷く惨めになった。

「そんなに泣きそうな顔しないで。若菜は何が不安？ どれだけ時間が掛かっても痛くないように気をつけるし、ちゃんと優しくするよ」

優しいセックスの定義がよく分からず、時間を掛けるという宣言も嬉しいと思えない。

漠然とした不安を自分でも言葉にすることができず、とりあえず思いついたことが、そのまま若菜の口をついた。

「……じ、時間ってどれくらいかかるの？」

「え？ あー……そう、だね。若菜次第で結構変わると思うけど、明日何か予定でもある？」

「よ、予定とかはない、けど……あの、明日から恭弥くんの奥さんとして、いろいろと頑張りたいから……」

仕事の手伝いはさせてもらえなくとも、しっかりと家事をこなして夫の生活をサポートすることは、妻として認めてもらうために必要だろう。

だから寝るのが遅くなったり、疲れ果てて動けなくなったりすると困るのだ。

そういう意味を込めて口にした若菜の台詞に、恭弥は一瞬目を丸くしたあと、嬉しそうにその瞳

を蕩けさせた。

「そう、ありがとう。じゃあ今から頑張って」

「え……？」

薄く口を開け、若菜の胸元に恭弥が顔を近づける。

言いかけた「待つて」という言葉が声になることはなく、触れられた感触に「んっ」と上擦った声が出た。

柔い双丘が恭弥の手によって形を変え、先端が口に含まれると若菜の背中をゾクゾクとしたものが駆ける。

恭弥の黒い髪が肌に触れて少しでもくすぐりたい。胸を触られているだけなのに、恥ずかしさを通り越して変な気分になってしまう。

強く掴まれているわけではなく、恭弥の触り方はどこまでも優しい。その絶妙なもどかしさが、逆に若菜の欲を煽った。

持ち上げて、撫でて、舐める。言葉にしまえばたったそれだけなのに、どうしてもこんなにも身体が反応するのだろう。

鼻から抜けたような声が漏れるし、こんな声を恭弥に聞かれているのだと思うと、それだけで恥ずかしくて堪らない。

思わず両手で自分の口を覆うが、声が少しくぐもったところで、恥ずかしさが消えるわけではな

かった。

こんなの、一生かけても慣れる気がしない。

「ふっ……ん、ひ……」

「こういうことされるの、若菜は初めてだよ。どんな感じする？」

「わ、かな……も、ごめんなさい……」

「何も謝ることないよ。柔らかくて気持ちいい。可愛いね」

あまりにも自然で、言い慣れているような甘い声。行為中によく言っている台詞なのだろうと、考えたくないのに考えてしまう。

しかし、たと言いい慣れているとしても、自分に向けられるとやっぱり特別だ。

普段は聞くことのない言葉が、一瞬でも嬉しいと感じてしまった。

「は……あ、恭弥くんやっぱり、こ、こういうのするの、慣れてる……」

「……うん。若菜から見たらそうだよ。ごめん」

謝るくらいなら、恋人でもない相手とこんなことしなければいいのに。

恭弥の謝罪は、すうつと若菜の心を冷たくさせた。

結婚してから仕方なく、義務感でやっているのだろうか。

若菜が心の中で漏らした泣き言が声になることなく、代わりに「あつ」とか、「んっ」という嬌声^{せう}だけが口からこぼれる。まるで感じているみたいだと、どこか他人事のように思った。

「声、いっぱい聞かせてくれて本当に可愛いね。ちゃんと感じてくれて嬉しい」
はっ、と恭弥が息を吐き、それだけでぶるりと肌が震える。

(嬉しいって、どういうこと?)

考えても仕方のないことなのに、いちいち気にしてしまう自分が悔しい。

若菜と違って、恭弥はこういう行為をやり慣れているのだ。

どういう触れ方をしたら相手が喜ぶか。

どういう接し方をしたら怖がらせることなく行為を進められるか。

そういうことが分かっているから、優しく声をかけてくれるのだろう。

そう考えておかないと、自分が大切にされていると勘違いしそうになる。

いや、大切に扱ってくれてはいるのだろうが、それはこの行為だけの話だ。

隠れて恋人を作り、家業に関わらせないような場所に勝手に住まいを用意する時点で、自分がどういう存在なのか分かっている。

セックス中に優しくされただけで、期待なんてしないほうがいい。

「っ、ひあ……!」

ぐるぐると考えごとをしているうちに、恭弥の左手が若菜の腰元に移動していた。

触れられた瞬間にびくりと身体が震え、下も脱がされそうになっているのだと気づき、思わず後ろに腰を引いてしまう。

「……まだ駄目？」

「あ、……え、え？　だって、あの……」

おろおろと視線をさまよわせ、返事を探す。

脱がないと最後までできないことは分かるし、ここまで進めて拒むのもおかしいと理解はしている。

それでも、恭弥はまだ服を一枚も脱いでいないのだ。そんな中で自分だけが裸になるのは、どうしても恥ずかしい。

「ごめ、でも……きよ、恭弥くんは脱いでないのに……？」

これではまるで脱いでほしいとねだっているようだ、言ったあとに気がついた。

若菜を見ながらまた驚いたように目を丸くした恭弥が、ふっと息をこぼして微かに目を細める。

「ごめん。触りたくて忘れてた」

「へ……」

少しだけ距離が開き、恭弥の手が若菜から離れる。

グレーのシャツに指をかけ、ゆっくりとした動きで一番上の釦を外す。

広くなった首元から身体を抜くように、裾から捲り上げて服を脱ぐ。

無駄な脂肪のついていない身体が惜しみなく晒され、不思議と目を逸らせない。

「ねえ、若菜からも触って」

とんでもない表情で、とんでもないことを言う。

息を呑んでいる間に手が取られ、そのまま恭弥のお腹へと若菜の右手が持っていかれた。

自身の手を追って、恭弥の下腹部に視線が落ちる。視界に入ってしまうと、もうその存在を無視することができない。

恭弥が脱いだのは上だけで、まだ下は穿かれている。それでも、不自然な形に布が引っ張られている状態が何を意味するのかなんて、若菜でも簡単に分かった。

「っあ、の……」

「は、可愛い。やっぱり先に触りたい」

「あ……」

触るって、何を、どうやって。

頭の中にぼんぼんと困惑が浮かぶが、それを言葉にする前に行為が進んでいく。

今度は止めることができず、パジャマのパンツに手を掛けられ、簡単に衣服は奪われてしまった。ショーツだけが残された現状に、今までとは比べものにならないほどの羞恥に襲われる。足を擦り寄せどうにか身体を隠そうとするが、こんなの何の意味もないだろう。

恭弥の手が内腿に触れ、ゆっくりと若菜の片脚を持ち上げる。それだけで簡単に、強く閉じていたはずの脚は割り開かれてしまった。

「うん。少しだけど、ちゃんと濡れてるね。もうちょっと慣らそうか」

「あ、やつ……待って、んんっ……」

下着の上から割れ目を指でなぞられ、足先にぎゅつと力を入れてしまう。

初めて人にそんなところを触られるのだ。羞恥しづうちと興奮で、ぶるりと背中が震えた。

「う、も……やだ、恭弥くん……」

「んー……痛い？」

「い、痛くないけど、汚れちゃ……から、やだ……」

言っている間にも指は止まらず、ショーツの上から撫でられているはずなのに、だんだん直接触られている気分になる。

恭弥のほうを見ていられない。しかしぎゅつと目を瞑つぶると、さらに敏感に触られていることを意識してしまう。

「別に汚してもいいよ。いっぱい濡れたほうが痛くないし、僕も嬉しい」

「あ、ひう……やつ……!」

濡れて下着が張り付くと、どんどん形が透けてしまう。

割れ目を往復していた指は次第に一点に移動し、形を主張し始めた芽を優しく引つ搔いて刺激した。

「うっ……も、それほんと、やだ……」

「濡れてきてるけど、いや？ 本当に？」

「……んんっ」

恭弥の顔が、すごく近い。耳元に直接声を吹きかけられているようで、響いた声にぞくぞくする。

「わ、分からな……。でも、なんか背中、ぞわぞわってして」

「大丈夫だから、若菜はそのまま感じてて」

「は……あ、んっ……」

どこか心許ないコレが、感じているということなのだろうか。

ぞわぞわした感覚に声を漏らし、少しずつ乱れていく息が寝室に響く。

その合間にも、恭弥は何度も若菜の唇にキスを落とした。

「んあ、あっ……ふ、きょうやく、うあ……っん」

「ここ触るの気持ち良い？ どんどん溢れてくる」

「っふ、や……ああ、っ」

ショーツをずらされ、隙間から入り込んだ指が今度は直に陰核に触れる。口内を撫でる舌も気持ち良くて、お腹の奥が焦しれたたく疼いたんでいるのが分かった。

——怖い気持ちが無くなったわけではないのに、気持ち良くなってしまうている。

気持ち良い？ と恭弥に指摘されると、初めての行為でこんなにも感じているのだと、嫌でも自覚してしまった。

いやいやと首を振ってみても、身体への反応は素直だ。くちつ、という濡れた音が、自分の下腹部

辺りから聞こえてくる。

そこが十分に濡れていると恭弥は判断したのだろう。強い痛みもないままに、指の一本がゆっくりと中に沈められた。

「あ、ああっ……あつ、ひう」

「狭いけどちゃんと入るね？　たくさん濡らしてくれて、いい子」
額に優しく口付けられ、思わず絆（ほだ）されそうになる。

こんなことをしている自分がいい子であるはずがないのに、恭弥に言われると素直に頷いてしま
いそうだ。

「は、あつ……っん、んん」

「若菜、声抑えなくていいから」

「だってこんな……あ、っはあ」

器用にも芽への刺激を続けられたまま、若菜の膣内に入った指がゆっくりと動かされる。

激しく出し入れされているわけでもないのに、どうしてこんなにお腹の奥に響くのだろうか。

差し込まれた状態で軽く指が曲げられ、恭弥の指の腹が若菜の内壁を緩く押す。足りない何かを
欲しがるように、無意識のうちに若菜からも腰を揺らしてしまった。

「……へえ。若菜って、そんないやらしいことしちゃうんだ」

「何……？　もっ、わかんないけど……そこ、なんかすごく……」

「教えてくれて偉いね。それじゃあもう少しこころ触ろうか」

「あ……っああ、っひ……やあ、だめ、だめっ、何かくる……」

腰を逃がそうと後ろに引いても、すぐに恭弥の指が追ってくる。

親指の腹で陰核を弄（も）られ、入ったままの長い指が若菜の弱いところを内側から押した。

耳元に唇が寄せられ、恭弥の息を吐く音や低い声が、若菜の脳に直接響く。

（――駄目だ、これ。本当におかしくなる）

「や……っは、あ……だめ、これ駄目、っも、恭弥く……」

「はは、ナカすっごいびくびくしてる。イキそう？」

「やだっ、それ続けるのやだ、うあ……っひ、あ……」

ずっと丸めていた足先に力を入れることができなくなる。大きな波が、もうすぐそこまで迫って
いた。

「あ、きちゃ、もっ……、あ、や、ひうっ……ンッ！」

大きくなった嬌（こゝろ）声と、びくりと跳ねた身体。強い快感が下腹部に広がり、頭の中まで真っ白に染
めていく。

初めて感じた波に、一瞬、何が起きたのか分からなかった。

指を入れられてイッてしまったのだと、そう気づくと同時に、若菜の中から指が抜かれる。

目の前に恭弥がいるというのに、だらしなく広げてしまった足を閉じることができない。

若菜の気づかない間に、入っていた指は二本に増やされていたのだろう。恭弥の中指と薬指が、ぬらぬらといやらしく濡れている。

「気持ち良かった？」

「……っ、あ」

「こっちも一緒に触ってたけど、ナカに入れた状態でイッてくれると思わなかったな。若菜が痛くなさそう良かった」

言われたことを理解して、顔全体が熱くなる。

中も外も分らないけれど、相度に恥ずかしいことを自分してしまったのではないだろうか。

「も、こんなのちがう……私、本当にこんなの……」

「いっぱい濡れてるし、一回挿れてみようか。もう大丈夫だと思うから」

「あ……」

真っ直ぐに目を合わせながら言われ、何と返せばいいのかわからなくなる。

挿れてみようというのは、この続きをするということだろう。

恭弥の服の下で、硬くなつて主張をしている、ソコ。ずっと目を逸らしていた部分に視線を向けてしまい、ごくりと若菜の喉が鳴った。

恭弥の顔を見て返事をすることができない。

指だけでこんなにもおかしくされたのに、これ以上のことをされたら、本気で心臓が壊れそうだ。

しかしこの行為は触って感じさせることが目的ではなく、若菜の中に恭弥を挿れないと終わらない。

何ひとつ大丈夫だとは思えないけれど、ここまで解してもらったのに、断ることはできなかった。

「……ん、して」

弱々しく言葉を発し、ちらりと恭弥の表情を覗く。

ほとんどゼロになった距離で、恭弥と再び視線が絡んだ。切れ長の目が、その瞬間に優しく細まる。

「ありがと。できるだけ若菜が痛くないようにするから、無理だつて思ったら教えて」

「……うん」

迷いながら返事をして、きゅつと唇を引き結ぶ。これ以上は無理なのにと、心の中で泣き言を漏らした。

「はは……ほんと、可愛い」

布の擦れる音だけが、やけに大きく聞こえる。服を着たままするつもりなのか、下着ごと服をずらしただけで、恭弥はそれ以上脱ごうとしない。硬くなった性器だけが取り出され、若菜は思わず悲鳴を上げそうになつてすぐに顔を逸らした。

一瞬とはいえ、初めて男の人のソコを見てしまった。

バクバクと心臓が嫌な音を立てて騒ぎ、胸の前でぎゅつと両手を重ねて握る。

長さも太さも指とは違うのだ。自分の中に入ることをリアルに想像して、今更怖気づく。もう見ることはできなくて、ソコから目を逸らしたまま、ただ泣きそうになりながら若菜は口を動かした。

「そんな、は、入らない……と、思う」

「僕は早く挿れたいけど、もう少し慣らそうか？」

挿れることは決定事項で、いくら若菜が不安がっても止めてはくれないのだろう。

ただ、少しでも挿れやすいように協力してくれるだけ。その方法が先ほどのような行為なら、ただ恥ずかしいだけだから、もうしてくれなくてもいい。

「……い、挿れて大丈夫」

「そっか、ありがとう。できるだけ痛くないように、ゆっくりしようね」

優しい声と共に、軽く頬に口付けられる。バクバクと騒ぐ心臓を押さえつけ、若菜は浅く息を吐いた。

——私の身体の、どこまで入ってくるのだろう。

そんなことをぐるぐると考えていると、恭弥が避妊具を取り出しパッケージを破る。

慣れた手付きでゴムを被せる恭弥を見て、数秒遅れてから「え？」と、間の抜けた声が若菜の口から飛び出た。

「うん？ 若菜、どうかした？」

「え、え……？ あれ……」

どうして恭弥は、コンドームなんて用意しているのだろうか。

夫婦なのにどうして避妊をするのか理由を考えてしまい、またバクバクと若菜の心臓が嫌な音を立てて騒ぎ出した。

（こんな触り方するの、よく考えたらおかしい）

セックスをする目的は人によつて様々だ。しかし、政略結婚により夫婦となった自分達が性行為をする理由なんて、子作り以外にないだろう。

子供を作ることを目的とするなら、こんなに時間をかけて触れる必要なんてないのだ。

最低限の露出で挿れて出して、必要なのはたったそれだけである。

胸を触ったりキスをしたり、お互い裸になったりする必要は一切ない。そんなことをしなくても、最低限の子作りはできるのだから。

（それなのにどうして、私はこんなに恥ずかしい格好をしているんだろう）

どういうつもりで恭弥がこんなことをしているのか、若菜は本気で分からなくなってしまった。避妊なんてされたら、子供を作るためという目的が、その時点で消えてしまう。

「ああ……怖い？ 時間はあるし、不安ならもう少し指で慣らしても」

「ちが、あの……なんでそれ着けるのかって、思ってた……」

「え？」